



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

モラヴィア派とその海外宣教事業：近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察

著者	宮本 憲
著者別名	Miyamoto Ken Christoph
雑誌名	キリスト教論藻
巻	41
ページ	51-70
発行年	2010-03-03
URL	http://doi.org/10.14946/00001621



モラヴィア派とその海外宣教事業

—近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察—

宮 本 憲*

1. はじめに

今年2010年はスコットランドのエディンバラで1910年に開催された歴史的な世界宣教会議からちょうど100年目にあたる。エディンバラでは百周年記念行事「エディンバラ2010」が6月に開催される予定である。1910年の会議は19世紀以来の近代プロテスタント海外宣教運動のクライマックスであると同時にその終焉の始まりを記した出来事と言われている。なぜなら、会議が20世紀に高揚するエキュメニズムの始まりを告げた一方で、海外宣教運動は欧米植民地主義とともに衰退していくことになったからである。

では、この近代プロテスタント宣教運動はどのようにして始まったのだろうか。エディンバラ1910百周年に向けて、世界各地でキリスト教宣教や宣教運動の再検討が行われているが、本稿ではその起源に注目することによって、キリスト教宣教を再考するよすがとしたい。

周知の通り、プロテスタント諸教会の海外宣教運動は、16世紀に始まるローマ・カトリック教会の海外宣教運動よりもはるかに遅れて開始された。15世紀に始まる大航海時代以降、最初の世界的植民地国家となったのは外洋に面したカトリック国家スペインやポルトガルであったこと、さらに、宗教改革によってプロテスタント教会が成立した地域では以後も長期にわたる宗教的混乱が続き、新しい教会制度の確立に多大な精力を注ぎ込まざるを得なかったため、海

* 本学一般教育系学科教員（キリスト教学担当）

外への伝道に関心を持つ余裕がなかったことなどによる。

英語圏では、英国人ウィリアム・ケアリ（William Carey, 1761–1834）が近代プロテスタント宣教運動の創始者とされることがよくある。彼はもともとイングランド教会（英国国教会）出身であるが、1792年に「異教徒への福音宣教パティキュラー・バプテスト協会」（Particular Baptist Society for Propagating the Gospel among the Heathen）という団体を作り、自身その最初の宣教師として翌1793年カルカッタに上陸した。そして、セランポールを拠点としてインドでの伝道に従事した。このケアリに刺激されて、英国では超教派的な「ロンドン宣教協会」（1795年創設）、イングランド教会の「教会宣教協会」（CMS, 1799年創設）などが作られ、米国でも「アメリカン・ボード」（1810年創設）、「アメリカン・バプテスト宣教協会」（1814年創設）などが作られた。この動きはヨーロッパ大陸にも及び、19世紀の近代プロテスタント海外宣教運動の幕開けとなる。それ故、ケアリは「近代宣教の父」と呼ばれて記憶されているのである。

確かに、19世紀のプロテスタント宣教運動において英米の宣教師や宣教協会の演じた役割は極めて大きい。スティーヴン・ニールは、ケアリ以後の非カトリック系宣教師の5分の4が英語圏の出身者で占められていたとしている。したがって、ケアリにこのような特別な地位を与えたいという英語圏の人々の心情は理解できなくもない。しかしながら、ケアリは決して最初の宣教師ではない。むしろニールが指摘するとおり、ケアリは「宣教事業への英語世界の大規模な参入」を記しているのである⁽¹⁾。

本稿の目的は、ケアリ以前のプロテスタント宣教運動において指導的な役割を果たしたモラヴィア派の宣教活動を概観し、その特徴を考察することである。日本はモラヴィア派の宣教地とはならなかったので、モラヴィア教会も存在しない。したがって、敬虔主義やジョン・ウェスレー、あるいは「ローズンゲン」との関わりの他はあまり言及されることもない。しかし、彼らはプロテスタント史上初めて本格的な海外宣教運動に乗り出したという榮譽を担っている。19世紀に産業革命の結果長距離の旅行が容易になり、宣教師が大挙してアジアやアフリカに出て行くようになるよりも前に、彼らがどのような動機や意図や目

ので宣教に乗り出したかを知ることは、プロテスタント宣教運動のより良い理解の手がかりとなるに違いない。以下では、前史としてモラヴィア派以前のプロテスタントによる海外宣教の試み、チェコ宗教改革以来のモラヴィア派の歴史、モラヴィア派の再生に重要な貢献をした敬虔主義者ツィンツェンドルフについて簡単に概観し、その後でモラヴィア派の宣教運動の展開と特徴を扱うことにする。

2. プロテスタント諸教会における海外宣教の始まり

宗教改革後、プロテスタント教会が海外宣教運動に乗り出すようになるまで長い時間が経過したが、それでも非キリスト教世界に福音をもたらそうとする試みが全くなかったわけではない。

ケネス・ラトゥレットによれば、ブラジルに最初のプロテスタント植民地の建設を試みて失敗したフランス人ニコラ・デュラン・ド・ヴィルゲニオン (Nicolas Durand de Villegaignon, 1510頃–1572) の遠征に同行したカルヴァン派聖職者が現地の住民にキリスト教信仰を伝えようとした⁽²⁾。1555年から1556年のことであり、成果を収めなかったとはいえ、プロテスタントによる最初の異教徒伝道の試みであった。また、スウェーデン教会にルター主義を導入した国王グスタフ1世・ヴァーサは、1559年にスウェーデン北部に住むサーミ人 (ラップ人) に宣教師を派遣した。しかし、彼らはヨーロッパに残る唯一の異教徒ではあったが、一部は名目的ではあれ既にキリスト教徒であった。そのため、ヴァーサの意図は福音の宣教というよりもサーミ人の国教への帰順という政治的目論見であった可能性が指摘されている⁽³⁾。

16世紀末期になると、東洋への進出を開始したオランダに異教徒にキリスト教を伝えようという気運が現われる。オランダの改革派でイングランド教会の聖職者となったアドリアヌス・サラヴィア (Adrianus Saravia, 1532頃–1613) が1590年、キリストの福音を全人類に伝えよとの命令は使徒だけではなく全教会を拘束するものだと主張し、さらに、1618年 Justus van Heurn がライデンで東インドへの宣教師の派遣を呼びかけた。そして、1622年にはライデ

んに神学校が設立され、12人の青年を教育して、宣教師としてアジアに送り出した。1627年に台湾に初めて到来したプロテスタント宣教師ゲオルギウス・カンディディウス（Georgius Candidius, 1597-1647）もこの神学校の出身であった。

一方、英国の植民活動も始めから異教徒の改宗をめざす動きを伴っていた。例えば、1607年に建設された英国最初のアメリカ植民地であるヴァージニアへの入植を許可したジェームズ1世の勅許状は、植民地化の目的を「いまなお闇の中に生き、神に関する真の知識と神の礼拝を哀れにも知らない人々にキリスト教を宣べ伝える」と明言している⁽⁴⁾。ニューイングランドの植民地に対する勅許状にも同様な宗教的動機が明言されている。そして、最初期の英国のプロテスタント宣教師として知られる長老派ジョン・エリオット（John Eliot, 1604-1690）によるアメリカ先住民への伝道活動はマサチューセッツ植民地を中心に行なわれ、彼の活動を支援するために「ニューイングランド福音宣教協会」（Society for the Propagation of the Gospel in New England）が1649年に長期議会によって設立された。

さらに、当初カトリック教徒が開拓したが名誉革命後国王の直轄地となったメリーランド植民地の国教会の強化のために、イングランド教会の聖職者トマス・ブレイ（Thomas Bray, 1656-1730）によって文書伝道をめざす「キリスト教知識普及協会」（Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK）が創設された（1698年）。さらに、彼の尽力によって、植民地における国教会のミニストリーを支援するために聖職者や学校教師を派遣する団体として「海外福音宣教協会」（Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG）の創設を認める国王ウィリアム3世の勅許が1701年に発布された。SPGはやがてアメリカ先住民への伝道やオーストラリア、ニュージーランド、西アフリカへの宣教師派遣にも携わるようになったが、当初の目的はアメリカ植民地に住む国教徒に対するミニストリーであった⁽⁵⁾。

ドイツ語圏でも17世紀になるとヨーロッパの外に住む異教徒に対する伝道に対する関心が見られるようになった。リューベックのペーター・ハイリンク（Peter Heyling, 1607-1652）はドイツ最初のプロテスタント宣教師として、

教会の支援を受けずに1633年にエジプトに赴き、その後、エチオピアで活動し、ヨハネ福音書のアムハラ語への翻訳も行なった。しかし、イスラム教徒によって殺害された。17世紀半ばになると、オーストリア出身でライデンで学んだユスティニアン・エルnst・フォン・ヴェルトツ（Justinian Ernst von Wetz, 1621–1688）が海外伝道の必要性を訴える著書を多数著し、1664年に自ら宣教師として南米のオランダ領ギアナ（現スリナム）へ赴いた。さらに、世紀末になると、哲学者ライプニッツが海外伝道の必要性を強く主張し、敬虔主義者フランクに影響を与えると共に、英国 SPG の設立の動因ともなったという。

17世紀のルター派正統主義は全般的に海外宣教には無関心で、ヴェルトツの訴えに対して理解を示さなかった。しかし、敬虔主義者が宣教に関わることによって状況が一変する。海外宣教が一つの運動となっていくのである。敬虔主義者の宣教への参入は、いわゆる「デンマーク・ハレ・ミッション」（Danish-Halle Mission）から始る。すなわち、SPG 創設に動かされたデンマーク王フレデリック 4 世が南インドの植民地トランケバル（Tranquebar, タミル名タランガンバディ Tharangambadi）への宣教師派遣を計画し、ハレの敬虔主義者アウグスト・フランケに接触した。この要請に応じて、1705年 2 人のドイツ人すなわちバルトロメウス・ツィーゲンバルク（Bartholomaeus Ziegenbalg, 1683–1719）とハインリヒ・プリュチャウ（Heinrich Plütschau, 1678–1747）がトランケバルに派遣され、タミル人の間で活動した。ツィーゲンバルクは新約聖書をタミル語に翻訳したが、これは最初のインド語訳新約聖書であった。

デンマーク・ハレ・ミッションは最後の宣教師が1837年に没するまで54名の宣教師をインドに送り出し、プロテスタント最初の恒常的な海外宣教事業となった⁶⁾。しかし、これをさらに一歩進めて、本格的な海外宣教運動へと発展させたのはモラヴィア派であった。これについて述べる前に、まずモラヴィア派の歴史を振り返っておきたい。

3. モラヴィア派の起源

今日、世界各地にモラヴィア教会ないしモラヴィア派と呼ばれる教会が存在する。正式の名称を「ユニタス・フラトルム」(Unitas Fratrum)といい、起源はプラハの改革者ヤン・フス (Jan Hus, 1370頃-1415) に指導されたチェコ宗教改革にまでさかのぼる⁽⁷⁾。16世紀の宗教改革よりもほぼ1世紀早く中欧の小民族の教会刷新運動として発生したため、その歴史は苦難の連続であった。1415年のフスの殉教の後、後継者たちは彼らに対するカトリック教会の度重なる十字軍を打破し、1457年北ボヘミアのクンヴァルト (Kunvald) にて自分たちを正式に「ユニタス・フラトルム」すなわち「一致兄弟団」(The Unity of the Brethren) と名乗るようになるが、それ以後長期にわたる迫害や内部分裂に苦しめられた。

宗教改革時代にはドイツやスイスの改革者と良好な関係を築き、文通を行なったが、1546年に始まるシュマルカルデン戦争で再び迫害を受け、多くがポーランドやプロシアに移住した。1609年ボヘミアとモラヴィアに信仰の自由が宣言され、ユニタス・フラトルムはこれらの地においてとうとう法的な認知を受けた主要な教会となった。しかし、1618年のボヘミアの反乱から始まる三十年戦争により状況が再度変化する。1620年の白山 (ピーラー・ホラ) の戦いにおいてチェコのプロテスタント貴族は壊滅的打撃を受け、皇帝フェルディナンド2世がボヘミアとモラヴィア全土においてプロテスタントの組織的根絶を実行した。その結果、ユニタス・フラトルムの大部分はザクセン、シレジア、ブランデンブルグ、ポーランド、プロシア、ハンガリーといった周辺地域に逃れていった。そして、一般にはラテン名コメニウスによって知られる監督 (主教) ヤン・アーモス・コメンスキー (Jan Amos Komensky, 1592-1670) の指導の下でディアスポラとしての生活を始めたのであった。

18世紀になると、この小さいプロテスタントの集団に歴史的な転機が訪れる。ドイツの敬虔主義者ニコラウス・ルードヴィヒ・フォン・ツィンツェンドルフ伯爵 (Nikolaus Ludwig von Zinzendorf, 1700-1760) との出会いと、その下での著しい覚醒の経験である。すなわち、1722年迫害を逃れて故国モラヴィア

を去ったウニタス・フラトルムの一団がザクセンにあるツィンツェンドルフの領地に居住することを許された。そこで彼らは「ヘルンフト」という共同体を創設した。やがて、ツィンツェンドルフ自身がグループの精神的指導者となり、多くの敬虔主義者が彼らに加わった。以後、ヘルンフト共同体は敬虔主義運動の重要な拠点として発展し、「モラヴィア兄弟団」ないし「モラヴィア教会」として知られるようになる。

4. 敬虔主義者ツィンツェンドルフ

ツィンツェンドルフについてはあえてここで触れるまでもないかも知れないが、モラヴィア派について語る上で避けて通ることはできない。モラヴィア派の宣教運動の始動にあたって彼は中心的な役割を果たし、彼の敬虔主義的信仰と霊性がその有り様を大きく決定づけているからである。

ツィンツェンドルフは1700年5月26日ドレスデンの貴族の家に生まれた。生後6週間で父と死別し、4歳で母が再婚した後は、上ソルブ語（西スラブ語の一つ）地域オーバーラウジッツのグロースヘナースドルフ（Grosshennersdorf）城に住む祖母に育てられた。現在ドイツ、ポーランド、チェコ3カ国の国境が接する地点からさほど遠くない場所にあるこの城は、当時は敬虔主義の一中心地であった。幼いツィンツェンドルフもその雰囲気の中で育ち、幼少時からキリストとの親密な交わりを深めていった。キリスト教宣教に対する関心もこの頃にさかのぼる。すなわち、1708年9月祖母がデンマーク・ハレ・ミッションからの書簡を朗読するのを聴いたことが最初のきっかけだったという。

1710年から1716年まで、ツィンツェンドルフは敬虔主義の拠点ハレにあるフランケのペダゴギーウムで学んだ。この間1715年にフランケの自宅で、トランケパールから一時帰国中のハレの宣教師ツィーゲンバルク、プリュチャウ、グリュンドラー（Johann Ernst Gründler, 1677–1720）と繰り返し会食し、宣教への思いを強くした。また、ハレ時代、「キリスト教とはキリストとの交わり、そしてキリストを通してあらゆる人々との交わりであり、そのような交わりなしにキリスト教はあり得ない」という基本的キリスト教観を明確に持つに

至った。そして、この「キリストにある交わりについての統一的・和解的理解」(unifying and reconciling conception of fellowship in Christ) を広めることが彼の強い願いとなっていたという⁽⁸⁾。

1716年に彼は法律を学ぶためにヴィッテンベルク大学に入学した。ヴィッテンベルクはルター派正統主義の中心地であったので、ハレの人々はこれに反対したという。しかし、ヴィッテンベルクでの正統派との接触を通して、彼は敬虔主義者と同様に正統主義者にもキリストへの親密で献身的な愛情が存在することを発見する。そして、このキリストとの親密な交わりすなわち「心の宗教」がお互いの違いを乗り越える共通の土台となることを確信した。これが彼に独自のエキュメニカルな視野を与えることになる⁽⁹⁾。

ヴィッテンベルクでの3年間の学究生活を終え、1719年春、学業の総仕上げとして「大旅行」に出発し、オランダ、フランス、ドイツ各地を訪問する。彼の主要な関心はヨーロッパの様々な教会を知ることであり、ジャック・バナージュ (Jacques Basnage, 1653-1723) らオランダの改革派指導者やパリのカトリック大司教ノアユ (Louis Antoine de Naoilles, 1651-1729) などに親しく迎えられた。このような出会いを通して、彼は「心の宗教」が教派を超えるキリスト者の一致の土台となり得ることをますます強く確信した。また、デュッセルドルフ美術館でイタリアの画家ドメニコ・フェティの絵画「エッケ・ホモ」を見て、そこに書かれていた「我、汝のためこの総てを為せり。汝、我のため何を為すや」という言葉に強い印象を受けたという⁽¹⁰⁾。

1721年5月に、ツィンツェンドルフは大旅行を終えてグロースヘナースドルフに帰着した。領邦教会の牧師となることを望んだが、家族の希望に従って、10月ドレスデンにてザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世の顧問官となった。しかし、キリストに仕えたいとの願いは捨てなかった。そこで、1722年4月祖母からベルテルスドルフ (Berthelsdorf) の領地を購入し、その領邦教会の牧師としてヨーハン・アンドレアス・ローテ (Johann Andreas Rothe, 1688-1758) を招聘し、ベルテルスドルフを教派に関わりなく迫害や抑圧に苦しむキリスト教徒の避難所として開放しようとしたのであった⁽¹¹⁾。

5. ヘルンフォートとモラヴィア派宣教事業の始動

ウニタス・フラトルムの小グループがツィンツェンドルフの領地にやって来たのはこのような時であった。ローテによってツィンツェンドルフに紹介された巡回説教者の大エクリスティアン・ダーヴィト (Christian David, 1690–1751) に導かれて、モラヴィア派のナイサー家 (Neisser) とその親族計10名がモラヴィア北部のフルネック (Fulnek) からイエズス会の迫害を逃れて密かに到来し、居住を許されたのである。そして、1722年6月17日、彼らは間もなく「主の守り」すなわち「ヘルンフォート」と呼ばれるようになる土地に新居を建てるために最初の木を切り倒したのであった。

次第にヘルンフォートには様々な人々が信仰の自由を求めて集まってきた。モラヴィア派だけでなくルター派、カルヴァン派、再洗礼派もいた。当然のことながら教理・礼拝形式・組織形態などに関する厳しい不一致が起こるようになった。また、ルター派領邦教会とウニタス・フラトルムの伝統や習慣の違いも問題となった。

このような危機に直面して、ツィンツェンドルフは顧問官としての職務を辞し、ヘルンフォート共同体の一致のために全力を傾けた。彼の説得によって1727年の夏共同体には合意と和解が成立したが、さらにこれが深い一致感をともなう強烈な信仰覚醒を呼び起こすに至った。既に3世紀にわたる歴史を持っていたモラヴィア派はこの覚醒を通して新しい生命を得、新たに再構成されることになった。けれども、それにとどまらず、プロテスタント史上前例のない精力的な海外宣教事業が始動することになったのである。今日のウニタス・フラトルムはウェブサイトはこの歴史的な事件を次の要約している。

ツィンツェンドルフは自らの模範と牧会によって彼らのキリスト者としての交わりを強固にし、古いウニタス・フラトルムを手本としていることが判明した「ヘルンフォート憲章」(1727年5月12日)の下における共同生活へと彼らを一致させた。彼らは熱心で絶え間ない祈りを通して、自分たちを互いに和解させるキリストの十字架の力をますます悟るようになった。

そして、1727年8月13日の聖餐式の執行における聖霊のほとばしりの中で、この一致を深遠かつ決定的に経験したのであった。

この意識的一致の経験から生じたのが、キリストにあるこの交わりを普遍的教会の他の分枝と分かち合おうとする熱意と精神力と、開いた扉が見つかればどこでも奉仕しようとする喜びであった¹²⁾。

こうして、ヘルンフートの海外宣教が始まったのである。信仰覚醒から僅か5年後の1732年、最初の2人の兄弟が西インド諸島のアフリカ系奴隷の間での宣教へと出発したのである。前年にデンマーク国王クリスティアン6世の戴冠式出席のためコペンハーゲンを訪れたツィンツェンドルフは、そこで西インド諸島出身の黒人奴隷と知り合った。彼はツィンツェンドルフにセント・トマス島の黒人たちのおかれた悲惨な状態を話し、福音を聞きたいという多くの人々、特に自分の姉妹の願いを語った。これに応答して、ヘルンフートは陶工ヨーハン・レオンハルト・ドーバー (Johann Leonhard Dober, 1706–1766) と大工ダーヴィト・ニッチマン (David Nitschmann, 1698–1772) を1732年8月21日コペンハーゲン経由でセント・トマス島に向かうべく送りだした。2人は同年10月8日にセント・トマス島に向けてコペンハーゲンから出帆した。

ちなみに、ニッチマンは北モラヴィアの生まれで、1724年ヘルンフートに知り、1735年には再生ウニタス・フラトルムの初代監督 (主教) に任じられた。同年ジョージア植民地に向うジョン・ウェスレーが船上で遭遇したモラヴィア派一行を率いていたのは彼であった。

1731年のコペンハーゲン訪問の際、ツィンツェンドルフはグリーンランドから来た2人のイヌイット人とも知り合った。2人によれば、1722年からグリーンランドで活動していたノルウェイ人宣教師ハンス・エーゲデ (Hans Egede, 1686–1758) の働きが失敗に瀕し、放棄される可能性があるとのことだった。ツィンツェンドルフはこの訴えにも応答し、1733年にグリーンランドの先住民イヌイット人に対して上記のクリスティアン・ダーヴィトをリーダーとする宣教師を送りだした。彼らはエーゲデと協力して働いた。ルター派正統主義者のエーゲデと敬虔主義者のモラヴィア派は対立することもあったというが、伝道

は成功を収めた。エーゲデは「グリーンランドの使徒」と呼ばれている。

なお、ステイーヴン・ニールは「1732年8月21日はモラヴィア教会によって彼らの宣教事業の始まりとして祝われている」と書いている。しかし、彼がこの日をグリーンランド・ミッション開始との関係で言及しているのに対し、モラヴィア教会史家ハミルトン父子はドーバーとニッチマンがコペンハーゲンに向けてヘルンフートを出発した日付としている。後者の方が正しいであろう¹³⁾。

セント・トマス島とグリーンランドに続いて、ヘルンフートは宣教師をラップランドに派遣した。しかし、名目的ではあれサーミ人がスウェーデン国教会の管轄下にあることを知って撤退した。1735年には南アメリカのオランダ領ギアナへの宣教が開始され、1737には南アフリカのコイコイ人（ホッテントット）に対する最初の宣教師を派遣した。また、グリーンランドでの成功はカナダ西岸ラブラドルのイヌイットにも福音を伝えたいとの願望を呼び起こし、1752年にラブラドルでの活動が開始された。西インド諸島における事業は1754年にはジャマイカにまで広げられた。また、北アメリカでは1735年から始ったジョージアへの入植の失敗後、1741年にニッチマンとツィンツェンドルフがペンシルヴェニアに入植地バスレームを創設、さらに50年代にノースカロライナにも入植地を建設した。これらは北アメリカ先住民に対するモラヴィア派の宣教活動の拠点となった。

このように、モラヴィア派は極寒のグリーンランド、ほぼ赤道直下のスリナムなど厳しい環境にある地域に次々に宣教師を派遣した。エドワード・ラングトン「特に困難で危険な環境にある人々の間での積極的な宣教事業への関心が、モラヴィア派の教会生活の主要な特徴であった」と書いているが¹⁴⁾、この特徴は、長期にわたる迫害下で3世紀以上も流民として生き抜いたしぶとさを持つ彼らが、信仰覚醒によって新たに生まれ変わることによって獲得した賜物なのだろう。

モラヴィア教会の近年の宣教事業について、Mary W. Helmsは1971年出版の著書の中で次のように書いている。

モラヴィア派の宣教団が現在存在する地域は次の通りである。ホンデュラ

ス（これは実際はニカラグア伝道域の延長だが）を除いて、すべて18世紀ないし19世紀に設立された。

西インド諸島（ジャマイカを含む10の島）：当初はアフリカ人奴隷、後には解放された黒人住民に牧会している。

イギリス領ギアナ [現ガイアナ] およびオランダ領ギアナ：クレオール、ブッシュ・ニグロ、ジャワ人、その他の東インド人 [インドネシア系住民]、奥地のアメリカ・インディオの間で活動。

ニカラグアとホンデュラス：主に西インドの黒人、ミスキート人、ラマ人、少数のスム・インディオに対して。

カリフォルニア：ミッション・インディアン [カリフォルニアに住む先住部族] の間で活動。

アラスカおよびラブラドル：エスキモー [イヌイット] の間で活動。成功したグリーンランド宣教はデンマーク国教会に引き渡された。

南アフリカ：当初はホッテントット人の間で活動；現在はケープ・カラードとカフィール [南アフリカの黒人に対する蔑称] の間で働いている。

タンザニア：主にハンセン病コロニーの維持に重点を置く。

西チベット：医療活動が中心。

ヨルダン：ハンセン病コロニーの維持⁽¹⁵⁾。

もちろん、モラヴィア派の宣教活動が成果を上げることができなかった地域も存在する。Helmsによれば、

ラップランド、ギニア、アルジェ、セイロン、ペルシア、エジプト、ニコバル諸島、オーストラリア南東部（およびケープ・ヨーク半島）における働きは、地域の政治的混乱、過度の支出や生命の喪失にもかかわらず成果がなかった、あるいは地域に他のキリスト教会が既に存在していたといった理由から放棄された⁽¹⁶⁾。

挫折したとはいえこれらの地域も含めて、一度も主要プロテスタント教会とは

ならなかったモラヴィア派がこれほど広範な宣教事業に専念し、世界の多くの地域にすむ様々な人々に福音を伝えようとしてきた事実には驚かされる。のみならず、Helms が指摘するとおり、「モラヴィア派の宣教事業がほぼ例外なく地上の孤立し土地や財産を奪われた人々の間に打ち立てられた」事実も注目に値する⁽¹⁷⁾。

6. モラヴィア派宣教事業の特徴

最後に、モラヴィア派の宣教運動にはどのような特徴が見られたかを簡単に検討したい。19世紀の海外宣教運動によって欧米の分裂したキリスト教がそのまま世界中に移植され、各地で欧米の諸教派がそのまま再生産されることになったが、モラヴィア派のゴールは宣教地に他教派と並立・競合する新たな教派を形成することではなかった。この方針は、ハミルトンが「1738年にツィンツェンドルフ伯が宣教師のために作成した指示の中に明確に示されている」と述べているように⁽¹⁸⁾、教派を超えたキリスト者の一致を願ったツィンツェンドルフ自身にまでさかのぼる。J. E. Hutton もこの点を指摘して、次のように書いている。

彼 [ツィンツェンドルフ] 自身モラヴィア派の監督であり、サクラメントをモラヴィア派の儀式に従って執行し、いくつかの宣教地ではヘルンフォートの制度——クワイア、愛餐、バンド、毎時の執り成しのような——を形成することを勧めたが、同時に、モラヴィア教会を拡張したいという欲求はほんの僅かも持っていなかった。他の宣教師たちは各々の祖国や各々の国教会のためにまじめに働いた。しかし、ツィンツェンドルフは神の栄光のためにだけ働いた。そして、宣教師に対する指示の中で、この点を十分にはっきりさせた。彼はきっぱりと言っている。「諸君は母国の教会を作ろうとしてはならない。諸君は回心者をモラヴィア教会のメンバーにしてはならない。彼らをキリスト者にすることで満足しなければならない」と⁽¹⁹⁾。

すなわち、形式化して生気を失った領邦教会や国教会は宣教の担い手とは見做されなかったが、いくつもの教派的伝統に分裂したヨーロッパ的な教会を宣教地に再生産することも彼らの目的ではなかった。したがって、モラヴィア派は既に他の教派による宣教活動が行われている地域には宣教師を派遣しなかったし、派遣した場合でも他教派の宣教師が既に入っていることが判明すれば撤退した。また、モラヴィア派の宣教師は公式の神学体系を教え込むことを避けた。単に教理的性格しか持たぬ議論を行ったり分派的な相違を恒常化させたりすることも避けるべき事柄であった。

モラヴィア派にとって、宣教とは教会ではなく真にキリストに生かされた個人からなる「教会内の小教会」*ecclesiola in ecclesia* が担う自発的な事業だったが⁽²⁰⁾、その目的は何だったのだろうか。モラヴィア派のシンボルは「神の子羊」である。これは、ツィンツェンドルフの信仰において神の子羊の崇拜が中心的であったことに由来している。神の子羊とはいうまでもなく十字架上で全人類の贖いのために御自分の命を献げられたイエス・キリストである。モラヴィア派の宣教師は、あらゆる人間の救いと一致の唯一の根拠としてのこの子羊における贖いの力と交わりに参与するよう人々を招くために派遣されたのであった⁽²¹⁾。ハミルトンによれば、ヘルンフートの宣教事業の開始以来、その独特の特徴を表現する言葉は「子羊のために魂を獲得する」(to win souls for the Lamb)であった。ヘルンフートの初期の宣教師の記録にはこの言葉が「相当の頻度で」繰り返し現われるという。そして、その意味は、「唯一の生け贄にして完全な救い主であり給うキリストを回心者が自分の個人的な救い主として受け止める」ということであった⁽²²⁾。

とはいえ、モラヴィア派宣教師にとってこの主目的が唯一の目標だったわけではない。むしろ、独自の宗教観に基づく多岐にわたる活動が行われた。そして、その活動が宣教地の人々の生活や文化全体に対して重大な影響を及ぼすこともあった。ハミルトンによれば、モラヴィア派は宗教を次のように考えていた。

宗教とは生活に付け足されたり通常の活動の中に人為的に挿入されたりす

るものではない。宗教は世俗と異なる領域を占めるのではない。それはあらゆる意識的活動に浸透し、これを支配している。したがって、心の回心 (heart-conversions) は生活のあらゆる関係においてその影響をあらわにする⁽²³⁾。

ここに出てくる「心の回心の影響」は次のように理解された。

もし十分な数が影響を受けるなら、種族全体が完全に変革されるであろう。家族生活が造られ、家庭が現れ、産業が興り、文明が進歩し、自己伝播力を持つ信仰が生まれ、キリストの支配を広める責任が公然と受け入れられる⁽²⁴⁾。

すなわち、個人の内的な変革を通して社会全体が変革されると考えていたのである。しかし、そのためには宣教師に依存しない自立した信仰共同体が必要である。そこで、個々人の魂に対して特別の配慮がなされる一方で、宣教師たちは宣教地の人々の間でやがて実現されると信じた目標、すなわち「自己伝播力を持つ信仰、キリストの支配を広める責任」をもつ共同体の形成に力を注いだ。より具体的には、「経済援助においても、御言葉と sacrament の執行においても、規律管理においても、組織的拡張や自己増殖の方策の効果的遂行においても等しく自立した現地人教会の組織と発展」のために努力した⁽²⁵⁾。

さらに、自立した現地人教会の建設には適切な教育を受けた現地人聖職者が必要である。そこで、必然的に教育が重視されるようになった。ここでコメンスキーの教育論の伝統が一定の役割を果たしたのかどうかは判らないが、宣教師は各伝道所に通例学校を設立した。男女別の二つの学校を建設することもあった。伝道所の出張所にも学校が作られることが多かった。このような学校は現地の唯一の教育機関である場合が多く、人々はそこで読み書き、算数、地理、聖書の歴史、歌唱、文法を学習した。こうして、宣教師は現地人を少しずつ教会での働きへと訓練していった⁽²⁶⁾。さらに、教育と同時に医療も重視されたが、こういった活動を通して、「宣教師のより厳密な意味での宗教的な教えに耳を

傾けようとする」傾向が未信者の間に生まれていったという²⁷⁾。

7. 結語

こうして始ったモラヴィア派の宣教運動であるが、このような小さなキリスト者の群れがどうして世界的規模の宣教に乗り出すことができたのか、またその献身とエネルギーが一体どこから生まれたのか大変に興味深い問題である。敬虔主義から生まれたこの運動がその後の啓蒙主義の時代においてどのような変遷をたどっていったのかも調べてみる価値があるだろう。

このような問題はまた別の機会に譲るとして、ここでは19世紀に高揚する近代プロテスタント宣教運動の特徴の幾つかをモラヴィア派が先取りしている点を指摘しておきたい。たとえば、中世にしばしば見られたようなキリスト教への集団的な改宗ではなく個々人の回心をめざしたこと、また「教会内の小教会」というボランティアなグループによって担われた事業であることがそうである。このような特徴は敬虔主義的なキリスト教理解を反映しているが、この2番目の点で、19世紀の宣教運動の重要な特徴、すなわち自発的に組織された宣教団体によって担われる運動という性格を持った海外宣教の先駆けとなっている。ボッシュは、キリスト教宣教に対する敬虔主義の貢献の一つとして、宣教を植民地政府や教会聖職者集団に限定された仕事ではなく、一般信徒が関わり参加することのできる事業としたことを挙げているが、モラヴィア派の宣教事業はまさにそのようなものとして始まったのである²⁸⁾。

また、モラヴィア派が自己伝道力をもつ自立した現地人共同体の設立をめざした点は、19世紀中葉の「三自運動」(three-self movement)を思い起こさせる。この運動はアメリカン・ボード主事のルーファス・アンダソン(Rufus Anderson, 1796-1880)やCMS総幹事のヘンリー・ヴェン(Henry Venn, 1796-1873)が提唱したもので、「自給・自治・自立伝道」(self-supporting, self-governing, self-propagating)の能力のある現地人教会の設立をめざすものである。モラヴィア派でもこのアプローチが自覚化されたのは19世紀になってからのようだが、にもかかわらず、それは18世紀以来の彼ら自身の経験に根

を下ろしていると推察される。また、彼らの経験が19世紀の「三自運動」に何らかの形でインパクトを与えている可能性も考えられる。さらに、教育の重視も19世紀のキリスト教宣教の大きな特徴であるが、ここにもモラヴィア派の経験が影響している可能性が考えられる。

モラヴィア派のビジョンがエキュメニカルな点も注目に値する。ボッシュはキリスト教宣教に対する敬虔主義の貢献として、国家や教派の境界を超越したキリスト者の交わりを目指すエキュメニズムの時代の先駆けとなったことをも指摘している²⁹⁾。本稿で触れたとおり、教派の壁を越えたキリスト者の一致はツィンツェンドルフの願いであり、この精神はヘルンフート共同体に反映され、さらに独自の教派の形成を避けるというモラヴィア派の宣教理念となった。それ故、A. J. Lewisはツィンツェンドルフを「エキュメニズムの先駆者」(the ecumenical pioneer)と呼んでいるのである³⁰⁾。

しかし、この理念の実現がそんなに簡単ではないことは歴史が示している。すなわち、教派の形成を避けて、キリストにある交わりの実現のみをめざしても、結局は教派化してしまう傾向があるのである。モラヴィア派自身がその後モラヴィア教会という一つの教派となってしまった。同様な皮肉な展開はキリスト教宣教の歴史において度々繰り返されてきた。このことは、キリスト者の真の一致のためには分裂した目に見える教会の一致という問題を避けて通ることができないことを示している。エキュメニズムにとって信仰と職制の問題は決して二次的な事柄ではないのである。

以上のように、モラヴィア派の宣教運動は、幾つもの点で19世紀以降のキリスト教宣教やエキュメニズムを先取りし、これらに関する問題を提起すると同時に、それらをより深く理解する手がかりをも提供してくれる。日本のキリスト教と直接の繋がりはなくとも、モラヴィア派の考察を通じて多くのものを得ることができるであろう。

註

- (1) Stephen Neill, *A History of Christian Missions*, rev ed. (Penguin Books, 1986), 222.

- (2) この節は主に Kenneth Scott Latourette, *A History of the Expansion of Christianity, Vol. 3: Three Centuries of Advance A.D. 1500-A.D. 1800* (New York: Harper & Row, 1967; Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1970), 42–50による。
- (3) *Ibid.*, 43; David J. Bosch, *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission* (Maryknoll, New York: Orbis, 1991), 246.
- (4) Latourette, 44.
- (5) Edwin S. Gaustad and Leigh E. Schmidt, *The Religious History of America*, rev. ed. ([San Francisco]: HarperSanFrancisco, c2002), 98–99; “USPG,” Wikipedia, <http://en.wikipedia.org/wiki/USPG> (2010年1月11日接続)。
- (6) “Danish-Halle Mission,” Missiopedia, http://www.missionmanual.com/wiki/Danish-Halle_Mission (2010年1月10日接続)
- (7) モラヴィア派の名称についてモラヴィア教会史家 J・テイラー・ハミルトンは次のように書いている：「この教会の本当の名称はウニタス・フラトルムないし一致兄弟団だが、一般にはモラヴィア教会として知られている。それが尊ぶべきプロテスタントかつ監督主義の団体として公の承認を獲得した1749年の法令においてそのように呼ばれているからである」(J. Taylor Hamilton, *A History of the Missions of the Moravian Church during the Eighteenth and Nineteenth Centuries* [Bethlehem, Pennsylvania: Times Publishing Company, 1901], ix)。
- (8) A. J. Lewis, *Zinzendorf the Ecumenical Pioneer: A Study in the Moravian Contribution to Christian Mission and Unity* (London: SCM, 1962), 25.
- (9) *Ibid.*, 27.
- (10) *Ibid.*, 28–29.
- (11) *Ibid.*, 30–31.
- (12) “Origin and Growth of the Unitas Fratrum,” Unitas Fratrum: The Moravian Unity of the Worldwide Moravian Church, http://www.unitasfratrum.org/pages/origin_and_growth.html (2010年1月20日接続)
- (13) Neill, *History of Christian Missions*, 201; J. Taylor Hamilton and Kenneth G. Hamilton, *History of the Moravian Church: The Renewed Unitas Fratrum 1722–1957* (Bethlehem, Pennsylvania: Interprovincial Board of Christian Education, Moravian Church in America, 1967), 46. エドワード・ラングトンはハミルトン父子に従っている (Edward Langton, *History of the Moravian Church: The Story of the First International Protestant Church* [London: George Allen & Unwin, 1956], 149)。
- (14) *Ibid.*, 147.
- (15) Mary W. Helms, *Asang: Adaptations to Culture Contact in a Miskito Community* (Gainesville, Florida: University of Florida Press, 1971), 246–47
- (16) *Ibid.*, 247.

- (17) Ibid., 246.
- (18) Hamilton, *History of the Missions*, 209
- (19) Hutton, J. E., *A History of Moravian Missions* (London: Moravian Publication Office, n.d.), 182. 「クワイア」(英語) ないし「コール」(ドイツ語) とは性別、年齢、独身・既婚の違いによって作られた共同生活を営む集団で、ヘルンフートの発展の基礎をになう組織となった (伊藤利男『ツィンツェンドルファーヘルンフート同胞教団を創った夫婦の物語』(鳥影社、2006年)、165-66頁; Lewis, *Zinzendorf*, 68)。
- (20) ボッシュは敬虔主義者が自発性の原理を宣教に導入したと指摘している (Bosch, *Transforming Mission*, 253)。
- (21) Lewis, *Zinzendorf*, 14-15, 63-77, 91
- (22) Hamilton, *History of the Missions*, 209.
- (23) Ibid.
- (24) Ibid., 210.
- (25) Ibid.
- (26) Ibid., 213.
- (27) Helms, *Asang*, 246.
- (28) Bosch, *Transforming Mission*, 255.
- (29) Ibid.
- (30) 註8にある Lewis の著書の書名を参照。

参考文献

- Bosch, David J. *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission*. Maryknoll, New York: Orbis Books, 1991.
- Gaustad, Edwin S., and Leigh E. Schmidt. *The Religious History of America*. Rev. ed. [San Francisco]: HarperSanFrancisco, 2002.
- Hamilton, J. Taylor. *A History of the Missions of the Moravian Church during the Eighteenth and Nineteenth Centuries*. Bethlehem, Pennsylvania: Times Publishing Company, 1901.
- Hamilton, J. Taylor, and Kenneth G. Hamilton. *History of the Moravian Church: The Renewed Unitas Fratrum 1722-1957*. Bethlehem, Pennsylvania: Interprovincial Board of Christian Education, Moravian Church in America, 1967.
- Helms, Mary W. *Asang: Adaptations to Culture Contact in a Miskito Community*. Gainesville, Florida: University of Florida Press, 1971.
- Hutton, J. E. *A History of Moravian Missions*. London: Moravian Publication Office, n.d.
- Langton, Edward. *History of the Moravian Church: The Story of the First International Protestant Church*. London: George Allen & Unwin, 1956.
- Latourette, Kenneth Scott. *A History of the Expansion of Christianity, Vol. 3: Three*

- Centuries of Advance A.D. 1500-A.D. 1800*. New York: Harper & Row, 1967; Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1970.
- Lewis, A. J. *Zinzendorf the Ecumenical Pioneer: A Study in the Moravian Contribution to Christian Mission and Unity*. London: SCM, 1962.
- Neill, Stephen. *A History of Christian Missions*. Rev ed. Penguin Books, 1986.
- 伊藤利男 『ツィンツェンドルフーヘルンフート同胞教団を創った夫婦の物語』 鳥影社、2006年
- “Danish-Halle Mission.” Missiopedia.
http://www.missionmanual.com/wiki/Danish-Halle_Mission (2010年1月10日接続).
- “Origin and Growth of the Unitas Fratrum.” Unitas Fratrum: The Moravian Unity of the Worldwide Moravian Church.
http://www.unitasfratrum.org/pages/origin_and_growth.html (2010年1月20日接続).
- “USPG.” Wikipedia. <http://en.wikipedia.org/wiki/USPG> (2010年1月11日接続).